京都大学	博士(文学)	氏名	池　田　恭　哉
論文題目	南北朝時代の士大夫における自己認識と社會觀		

（論文内容の要旨）

本論文が對象とする南北朝時代、中國は南北に分斷され、北朝は非漢民族による支配が續き、中國史上でも殊に混迷を深めた時代であった。本論文は、そうした時代に生きた知識人（士大夫）が、複雜な社會の中で、一體何に依據する存在として自己を認識し（自己認識）、また如何に自らの屬する社會を捉えていたのか（社會觀）ということをめぐり、常に南北兩朝を比較しながら、その時代性の中で多角的に考察を試みたものである。

觀點や手法の特徵を三つ擧げたい。第一は、これまで多く南朝の影響下に語られてきた北朝を、南朝と對等に扱い、そこで生きる北朝士大夫に獨自の思想を探究したことである。第二は、自己認識と社會觀を、二つの別個の問題として論じるのではなく、必ず社會の中に生きる士大夫としての自己認識を考察したことである。第三は、從來の思想史の分野で必ずしも積極的に利用されなかった石刻史料や韻文にも、同時代の樣相や士大夫の思想を看取し得る文獻として目を向けたことである。

以下、「緒言」と「結語」に挾まれた三部計六章について、各章ごとの要旨を記す。

第一部「顏之推論」には、顏之推（531～591 頃）を對象とした論考二篇を收める。

第一章「顏之推の學問における家と國家」。顏之推は南朝に生まれるも、戰亂により北朝に生き、最後は隋で生涯を閉じた。本章ではまず、彼の主著『顏氏家訓』に基づき、彼がこの激動の生涯の中で依據するものとして見出した「學問」の内實を探った。顏之推は、讀書を通じて備えた學問によって書物の記載を吟味する「眼學」を標榜した。そしてその學問は、家を治め官吏として國家に奉仕することに實用されるべきものだったのである。

學問の實用對象たる國家と家の位置づけだが、國家について、彼は一つの王朝への奉仕を理想としつつ、屬する國家が三度も滅亡する中で、現在仕える王朝への、自らの備える學問による奉仕を強調した。家については、「眼學」に基づく學問に立脚して生きる士大夫としての生の在り方を、子息に教育する場として位置づけた。同時代の士大夫たちが、自らの家格の向上ばかりに汲々とした中で、この位置づけは顏之推に獨特なものである。

如上の學問觀と家、國家の位置づけは、士大夫を讀書と學問に從事する存在と認識し、顏家が學問に立脚して國家に奉仕する士大夫の家柄と自任した、顏之推の士大夫としての意識による。彼はその士大夫像と意識を子孫に明示し、彼らが顏家の學問を繼承し、それに立脚した士大夫として家を治め國家に奉仕することを、『顏氏家訓』を

通して求めたのだ。これこそ『顏氏家訓』の家訓たる所以である。

『顏氏家訓』は、學問を根據とした個人と、家と國家の三者を包含した形での士大夫の生き方を提示し、家と國家は學問に立脚して生きる士大夫の意識を媒介に連續した。こうした認識は、當時に在って非常に特異であり、また後の科擧制度が打ち出し、宋代に至ってより強く描出された、學問に立脚する士大夫像と重なる點で、『顏氏家訓』はただ顏家の家訓としてのみならず、後世まで「家訓の祖」として讀み繼がれることとなったのである。

第二章「顏之推における『顏氏家訓』と『冤魂志』」。本章ではまず、『顏氏家訓』と竝ぶ顏之推の主著『冤魂志』について、史實に基づいた說話を廣く收集したものであり、純然たる顏之推の創作でないため、その內容の傾向にこそ彼の『冤魂志』編纂の意圖があるとの見通しから、その內容を檢討した。『冤魂志』の 59 篇の說話は全て、「怨恨を抱き悲慘な死を遂げた人物が、その怨恨を晴らすべく、怨恨の對象に現世で報復する」形式である。これは、顏之推が人間同士の信賴關係を重視し、またそれを裏切れば「死」という恐怖が現在でも起こり得ることを主張するためであった。

さて『史記』魏其侯列傳が載せる、田蚡と竇嬰・灌夫の二人の間の爭事をめぐり、『顏氏家訓』省事篇では、灌夫による竇嬰の援助を君子の所爲に非ずと批難しながら、『冤魂志』では、竇嬰と灌夫の兩人が處刑されて後、田蚡に報復して彼を死に至らしめた話を載錄し、それを容認するという、兩著作の差異がある。

では『顏氏家訓』省事篇で友人の援助が否定されているかと言えばそうではなく、彼は度を超えた援助を否定し、「仁」と「義」の間でうまく調整するように言い、その調整を果たす存在が「禮」であった。この「禮」は、顏之推にとって、士大夫が自らの備える學問によってあらゆる場面で適切に判斷しながら、實際の生活に適用させていくものであり、士大夫の士大夫たる所以でもあったのである。

顏之推によれば「禮」はまた、人情より生じながら、人情の勝手な發露を抑える役割を擔うとされ、ために公義が私恩に優先される(『顏氏家訓』風操篇)。つまり彼は、常に人間同士の信賴關係を重視する「私」の世界(「仁」)と、より廣く社會との關係を考慮する「公」の世界(「義」)との間で揺れ動いていた。そして『冤魂志』では一人間として「私」(「仁」)の世界を徹底的に展開しつつ、『顏氏家訓』では一士大夫として「公」(「義」)の世界を重視し、「仁」と「義」、つまりは「私」と「公」の世界を、人情に基づきつつ、士大夫としての行動規範たる「禮」によって、うまく調整するように言った。ここに『冤魂志』と『顏氏家訓』の書き分けが存したのである。

第二部「北朝士大夫と國家 ―仕官と隱逸をめぐって―」では、これまで南朝士大夫に比して輕視されてきた北朝士大夫を對象とし、彼らの社會觀をめぐって、特に仕官と隱逸の間の動向を中心に考察した論考を收める。

第三章「『劉子』における劉晝の思想」。本章では、北齊・劉晝による『劉子』を扱った。『劉子』は、あらゆる物事の價値には絶對性がなく、その狀況次第で決定すると說

くと同時に、狀況に關係なく修養し得る「性」に着目し、それを優れたものにしていれば、いつか狀況次第でそれを存分に發揮できると說く。そしてこれを士大夫の仕官に適用し、いつか「勢」が通じたときの仕官に備えて自己修養するよう主張して、仕官と修養を儒家と道家に對應させる。こうして仕官＝儒家と修養＝道家の兩價値が劉晝の中では竝存するが、それでもなお彼は、最終的には儒家、すなわち仕官を追求する立場を貫いたのである。だが注意すべきは、彼が決して出仕すべき理想的な時世を想定はしておらず、あくまで仕官することを前提に、仕官したその先に、その時世に合致した施策を模索したのである。

以上、これまで内容の考察が十分ではなかった『劉子』55 篇の全體を通して存する、北朝の一士大夫・劉晝による強い仕官への拘りが見出され、かつ北朝士大夫による、國家への奉仕を望む意識の一端が明らかにされた。

第四章「北朝と隱逸」。『南史』と『北史』の隱逸傳は、前者の 46 人に對し後者はわずか 7 人を列するのみで、個別の王朝の正史でも、北朝は『魏書』逸士傳に 4 人が列せられるのみである。また顏之推は、北方の嚴肅で切迫した政治・教化により、北朝では隱棲する者はいなかったと言う。本章は、如上の事實や顏之推の發言を出發點に、北魏から東魏・北齊および西魏・北周に至るまで、これまで南朝に比してあまり顧みられなかった北朝の隱逸の實態を全般的に明らかにし、またそれに至った原因を考察したものである。

北朝の正史には、北朝の法制とその適用の嚴しさ、歷代皇帝の粗暴な樣が多く見え、顏之推の言葉と呼應する。また「致仕」や「服喪」を強く否定して仕官させる中央集權への志向もうかがえ、それが出仕を拒む韋夐に贈った北周・明帝の招隱詩にも表出される。そこでは隱逸を詠じた最後に、隱者として名高い「商山四皓」が一度世に出て來た事實を踏まえて、韋夐に出仕を望む。これは南朝の招隱詩で作者自身が隱逸へ傾斜する結びとは大きく異なる。また北朝の不安定な俸祿支給では、南朝で盛んな「朝隱」も困難であった。

また『魏書』逸士傳序では、貪欲の風の抑制を理由に隱者を許容しながらも、同時に名教による管理という風教のため、隱逸の督責を必要視し、さらには隱逸を政治に關わることに比して低く評價する。ここに表明される隱逸觀は、隱者のための傳の序に見えるものとして異例で、北朝の強い仕官の要求を示す。

かくも北朝では朝廷の仕官の要求が強かったが、例えば家への孝と國家への忠が對置される際、南朝では總じて孝が優先されたのに對し、北朝では忠が優先された。そもそも皇帝自身が、私事より公事を積極的に優先した例が見える(北魏・孝文帝)。また士大夫層には、「忠孝竝び立たず」という意識が定着して忠が優先され、結果として仕官への強い欲求が見出され、これも北朝で隱逸の選択肢があまりとられなかった要因であった。

ただ北朝で隱逸が全くなかったわけではない。北朝で山水が多く一時的に政治混亂

を避ける場であった中、官を去った祖鴻勲は、南朝のように山水と隱逸を結びつけて說く。また北朝の知識人層の間には、官を去って自らの是とするところに從う生き方を是認する風潮が確かに存した。すると明帝の詩は、韋夐のみならず、彼の生き方を支持する知識人層の取り込みをも企圖したものであると言える。

以上、北朝では隱逸への志向が存在はしていた。だが南朝に比すれば壓倒的に少なく、そこには朝廷からの強い仕官の要求と、士大夫による國家への忠の意識があったのだ。

第五章「新王朝への意識 ―北齊滅亡期の士大夫たち―」。北齊が北周に滅ぼされた際、北齊の盧思道や顏之推らは、集團で北周の都・長安に赴き、蟬を題材にした作品を物した。兩者の作品を比較するに、新王朝たる北周にどう應對するかをめぐり、大きな相違がある。つまり、盧思道は斷固として北周への仕官を拒否して隱逸を示唆し、一方の顏之推は、過去の國家の大事に獻策した人物に自らを擬えて、國家のための臣下たらんとしたのである。

さて盧思道・顏之推の集團は18人を數え、彼らの中には北周への反亂軍に參加したり、北周で不遇だったりした者もいたが、やはり北周にもある程度は名の知れた文人集團であったため、基本的には北周に何ら抵抗なく受容され、仕官した。またそれ以外の北齊士大夫についても、もちろん北周に仕えることを潔しとせず、北齊に忠義を盡くさんとした人物もいたが、基本的には北周に仕官したのである。そこにはそうせざるを得ないという現實や、あるいは北周の武帝が、名の知れた18人を集團で召集したり、北齊に忠義を盡くさんとした人物であるが故に取り込み、その忠義を北周に盡くさせたりしたような、柔軟な北周の受容策が影響していたのであった。

こうして見ると、北齊の滅亡に際し、新王朝・北周に對する北齊士大夫の意識や態度には、北周への仕官を拒んで、忠義を北齊に盡くしたり隱逸を望んだりする傾向と、やはり現實として北周に仕官し、あるいはそこで國家のために働こうとする傾向があった。盧思道と顏之推の蟬を詠じた作品には、ただ二人の個性とは片付けられない、當時の北齊士大夫が北周に臨んだ意識と態度のパターンが、兩極端な形で如実に表出されていると言える。

第三部「隱逸觀の變移 ―隱逸と節義―」は、第二部で見た南北朝期の隱逸觀が、後の唐代・宋代に至ってどう變移したのかを、隱逸と節義という觀點から考察した論考を收める。

第六章「「溥天之下、莫非王土」攷 ―隱逸と節義―」。『詩』小雅・北山「溥天之下、莫非王土。率土之賓、莫非王臣」の句は、「この世界は土地も人臣も、全て王の支配下にある」という意味である。この句は諸書に引かれ、多樣な議論の論據として利用された。その例を擧げれば、絶對的な君臨者たる天子の尊嚴を示したり、中華が夷狄を支配する場合、その兩者の間に區分がないとしたりである。

君主による全ての土地と人臣の支配を根據づける「北山」の句の影響は、その支配

の枠からはみ出んとする隱者にも及ぶ。漢代から三國そして南朝の齊・梁にかけて、前半二句を根據に、隱者が食するものとて所詮は王朝の食物だと、隱者、とりわけ二君に仕えずという節義を守ったことで著名な伯夷・叔齊を批判する論理が存在したのだ。これは、もう食物も口にできぬと迫り、隱者を死しかない狀態に追い込む點で、後半二句で全ての人が王臣だと迫るより、かなり効果的である。

だが六朝以降、前述の論理は姿を消す。それは一つには、三國・六朝という王朝が興亡を繰り返す動亂期には、二君に仕えずという態度をとるのは難しかったが、宋代に入って「節義」が重視され、その二君に仕えずという態度が稱揚されたことによろう。またもう一つ、程伊川「餓死事極小、失節事極大」という語が、元來は寡婦の再嫁を戒める語であったが、宋代から清朝まで綿々と、惡世に出仕したり二君に仕えたりすることを戒める語として用いられており、「死」しかない狀況が、むしろ節義を失うことに比すれば輕視されたことにもよろう。このような「節義」の重視が、六朝期までと宋代以降において、隱逸觀を變移せしめたと言えるのではないか。

最後の「結語」では、本論文の内容を、今後の課題や見通しも示しつつ、まとめた。ここでは本論文が明らかにした點について記す。

冒頭にも書いたように、南北朝時代は中國が南北に分斷され、王朝が興亡を繰り返した。そこで從來の研究では、先行する魏晉時代も含め、安定しない王朝から離れたところで門閥貴族制社會が成立し、士大夫はそれを據り所に生を營んだとされ、一方の王朝に對する奉仕の意志は見られないとされてきた。

だが南北朝期に入ると、すでに門閥制度に依據するだけでは立ち行かなくなり、例えば顏之推のように、家柄ではなく學問に立脚し、社會との關係を常に意識する士大夫像が描出された。加えて、そうした士大夫としての在り方を教育する場としての「家」が見出され、個人と家、國家を一體として捉える認識が存在したのである。これは後の唐宋の士大夫像や認識により接近し、南北朝時代は、單に門閥貴族制社會として魏晉の延長線上に置くのではなく、次代を開く時代としても位置づけられるであろう。

また北朝の士大夫を中心に、仕官して國家に奉仕する意圖が確認された。だがそこには必ず、仕官と對になる隱逸や現王朝への違和感が存し、その間で揺れ動き、國家の變移に鈍感ではいられない士大夫の精神の在り様が、明らかになった。これまで「無節操」と評價されがちであった彼らの國家觀は、修正が必要となるであろう。また隱逸觀をめぐる「節義」を軸とした檢討により、ここでも次代、具體的には宋代との相違が見出された。

それまで社會を支えていた貴族制が動搖し、王朝が幾度も興亡を繰り返す中で、士大夫たちはそれぞれ多樣な價値觀と態度を以て社會の變化に應對した。本論文は、その多樣性の内實に多角的に迫ったものなのである。

（論文審査の結果の要旨）

これまでの魏晉南北朝史研究は、南朝の研究が盛んであり、北朝はいささか看過されてきたきらいがあるが、思想史の分野では、時に南朝との對比で語られることはあっても、忘れられた存在であることが特に顯著であったと言える。本研究は、そのような狀況の下で、北朝に光を當て、具體的な著作あるいは人物に焦點を當てて丁寧に議論を重ね、北朝の士大夫の精神世界を、家や國家との關わりを中心に明らかにしようとする意欲作である。

本研究についてまず特記すべき重要な點は二つある。ひとつは、昨今はやりの電子檢索による、語句の抽出などから考察するという手法を取らず、對象とする著作を通讀することは言うまでもなく、まずは正史を通讀してから話を進めるという、基本的な手法に從ったことである。これは、もう一つの點とも關わる。即ち、思想史の研究ではあるものの、歷史文獻、ならびに文學作品といった、文史哲の廣い分野にわたる讀書と分析の結果であるという、いわゆる中國學の王道を守った研究であるということである。これは、極度に細分化しつつある學界の動向の中で、今では貴重な研究と言えるものである。以下、三部六章からなる内容について、簡單に記述しておく。

第一部「顏之推論」には、顏之推を對象とした論考二篇を收める。第一章「顏之推の學問における家と國家」では、顏之推の、學問によって自己を完成させ、國家の運營に參畫することを目指す士大夫像を提示する。これは舊來とは異なる新しい士大夫像であり、さらにその完成の爲に家庭における教育を重視したことを指摘する。これは、後代にあってはめずらしくないあり方であるが、それが顏之推の時代には新しいことだと發見、指摘した著者の功績は大きい。第二章「顏之推における『顏氏家訓』と『冤魂志』」では、顏之推の二つの著作、『顏氏家訓』と『冤魂志』の性格の違いを論じる。そこでは、人閒同士の信賴關係を重視する「私」の世界（仁）と、より廣く社會との關係を考慮する「公」の世界（義）との閒で搖れ動いている顏之推の姿を分析し、『冤魂志』では一人閒として「私」の世界を徹底的に展開しつつ、『顏氏家訓』では一士大夫として「公」の世界を重視する、という顏之推の「書き分け」があることを指摘する。これは、しばしば志怪小説史の中でとりあげられることはあっても、顏之推の著書としてその編纂意圖が論じられることがほとんどなかった『冤魂志』に對する斬新な視點であり、顏之推研究に新たな地平を見いだすものである。

第二部「北朝士大夫と國家 ―仕官と隱逸をめぐって―」では北朝士大夫の言動を、仕官と隱逸という觀點から考察する。第三章「『劉子』における劉晝の思想」では、劉晝が仕官と修養を儒家と道家に對應させ、仕官＝儒家と、修養＝道家という兩價値を竝存させつつも、それでもなお、最終的には仕官を追求する立場を貫いたことを示し、北朝士大夫による國家への奉仕を望む意識の一端を明らかにする。從來の研究では看過されてきた、劉晝に對する新しい見方を示すものとして重要な指摘である。第四章「北朝と隱逸」では、北朝の隱逸の實態とそれをもたらした原因を考察する。そこで

は、北朝がさまざまな意味で隱逸をするのが困難な狀況であったことが明らかにされ、また、北朝では仕官の要求が強いなか、家への孝と國家への忠が對置される際、南朝では總じて孝が優先されたのに對し、北朝では忠が優先されたことを北朝で隱逸という選擇がなされなかった理由として提示する。これは、從來ほとんど省みられなかった北朝隱逸の實態を明らかにした、本論文の中でも特に重要な指摘のひとつである。第五章「新王朝への意識 ―北齊滅亡期の士大夫たち―」では、盧思道と顏之推という二人が、他の北齊出身者とともに詠った蟬の詩を分析することにより、二人の仕官と隱逸に對する見方の相違を明らかにする。北齊滅亡時の新王朝北周に對する北齊士大夫の意識や態度には、仕官を拒む、あるいは隱逸を望む傾向と、北周に仕官し、國家のために働こうとする傾向の二つがあり、盧思道と顏之推の作品には、ただ二人の個性とは片付けられない、當時の北齊士大夫が北周に臨んだ意識と態度のパターンが表出されていることを明らかにする。そしてこの章によっても第一章の顏之推の士大夫觀の新しさが確認されるのである。このように本章は、文學史學哲學を横斷して考察した意欲的なものと言える。

第三部「隱逸觀の變移 ―隱逸と節義―」は、第二部で見た南北朝期の隱逸觀が、後代どう變移したのかを考察している。第六章「「溥天之下、莫非王土」攷 ―隱逸と節義―」では、君主による全ての土地と人臣の支配を根據づける、表題の「北山」の句の解釋をめぐって、後世の隱逸觀が探られる。この句は、六朝時代には、君主による支配から逃れようとする隱者にも影響し、二君に仕えずという節義を守ったことで著名な伯夷・叔齊を批判する論理が存在したが、六朝以降、その論理が姿を消すこと、そしてその理由が、宋代以降の「節義」の重視によるものであることを明らかにする。六朝時代にとどまらず、後代への見通しをも明らかにしており、著者の幅広い目配りを示す好篇である。

「結語」には、本論文の内容がまとめられ、「それまで社會を支えていた貴族制が動搖し、王朝が幾度も興亡を繰り返す中で、士大夫たちはそれぞれ多樣な價値觀と態度を以て社會の變化に應對した。」としている。

なお、先にも少し觸れたが、各處で考察された議論や、各章で得られた結論は、後代から考えると、必ずしも特異ではない、ごく通常の事柄と思えることがある。しかしこれは、六朝時代に既にそうであったと示したこと自體が大きな發見であり、それを南朝の分析ではなく、これまで看過されてきた北朝の狀況の分析によって抽出し得たのは、著者の大きな功績である。たとえば著者が指摘するこの時代における『禮記』大學篇の思想の重視は、中国思想史研究の上で大きな展開を予想させるものであろう。

ただ氣になるのは、著者は「仕官と隱逸」「公と私」といった對立概念でもって事象を區分して論を進めるが、そもそもそのように單純に圖式化、分類してあてはめること自體が妥當であるかについて、さらに議論する必要が感じられた。また、正史の記述を素直に受け止めすぎなのではという疑念、即ち、正史が記述しているのは、當時

としてはめずらしいからこそ書いているという側面も視野に入れた上で、總合的に考察する必要も感じられた。しかしそれらは今後の著者の研究の進捗によって、さらに精緻な議論のもとに明らかにされていくべきものであり、本論文の價値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文學）の學位論文として價値あるものと認められる。なお、2013 年 2 月 22 日、調査委員三名が論文内容とそれに關連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。